

学生の「産み出す力」を引き出したい

佐藤 美春

国立大阪病院附属看護助産学校助産学科

寺田恭子さん、「りれ一随筆」のバトンをありがとうございました。共に厚生省看護研修研究センターで学んだ頃を懐かしく思い出します。私が助産婦養成所の教員となって丸1年が過ぎました。学生と共に泣き、笑い、その中で教育の難しさとおもしろさを感じています。浅い教員経験ではありますが、この1年間で印象に残った両親学級について書いてみたいと思います。

学生が生き生きと取り組む両親学級

当校では、4回の両親学級を開催しています。学生は両親学級を企画・運営していくことで、創造力を発揮し、実践力をつけ、さらにグループダイナミクスを体験的に学ぶことができます。

はじめは両親学級の見学もしたことがない学生もいたため、イメージを膨らませるためにアイデアを出し合いました。そして、「かわいい赤ちゃんのためにパパとママができること」というテーマで取り組み始めました。目標はどんな夫婦、親子、家族をイメージしていくのかというふうに広がっていきました。企画が具体化していくにつれて、学生の目は、生き生きと輝きはじめました。

楽しく参加し、体験して学べること

両親学級の企画のおもしろさは、参加者が楽しく学べるための方法を考えていくところにあります。学生は、掛け図、音楽、ビデオやOHPなどの教材を工夫し、更に、演劇や人形劇、アロマセラピー、フラメンコなどの特技を生かして教材を

創り上げていきました。そこには、「楽しく学んでもらいたい、心に残る企画にしたい」という、学生の希望が大きく反映していました。

3時間という限られた時間を、体験し、考えながら参加できるようにと、議義では鮮やかな掛け図を使い、発問やクイズなどを取り入れました。

演劇を取り入れた指導では、関西のお笑い劇団真っ青の演技で、妊婦やその家族を演じたり、産婦や夫を演じながら指導していきました。中でもサザエさん風褥婦の家庭訪問という設定では、実際の家庭の状況を小道具でセッティングし、新生児の健康状態の見方や育児環境を見ながら学べるというおもしろい企画もありました。また、最近の料理番組にヒントを得て、「簡単にできる離乳食教室」では、学生演じる料理評論家が登場し、離乳食を作るポイントをわかりやすく実演し、説明しました。学生の演技力と企画内容に、参加するご夫婦も思わず引き込まれていました。

家族計画は、一般に伝えにくいこと、聞きにくいことであり、学生も企画の段階で四苦八苦していました。そこで、家族計画に人形劇を取り入れることにしました。そして、これからの家族をどう設計していくのか、という大事なことをご夫婦で話し合っていく場を設定できました。

夫が主体で行なえる企画として、「妊夫体験」というのもありました。夫は5kgもある妊婦モデルをお腹につけて家事をしてみて、初めて妻の気持ちがあったようで、思いやりが生まれてきたようです。

更に妊婦体操、呼吸法・補助動作、沐浴などは



妊娠中に修得してほしいことです。楽しい雰囲気にするための軽快な音楽とわかりやすい演技で、ご夫婦が協力しながら実施していくことができたようです。特に分娩経過中の産婦役と夫役の迫真の演技と、ピアノ演奏を取り入れてのリズミカルな呼吸法は印象に残り、参加者にはとても好評でした。

胎児・わが子への思いやりの 心を育てる温かい企画

知識・技術の修得に加えて、新しい家族を迎え入れるためには、妊娠中からの心の準備も必要です。そこで、企画されたのが「赤ちゃんのためのおもちゃづくり」「赤ちゃんからのメッセージ」というものでした。胎児期からの親としての役割意識と思いやり、優しさを育てることを意図したものでした。

「赤ちゃんのためのおもちゃづくり」は、物があふれ、いつでも簡単に物が手に入る現代に投じられた愛情の記念品とでもいうべきもののように思います。ペットボトル、鈴やビーズなどを利用した簡単な物ですが、ご夫婦が協力して創り出す喜びや、こどもへの思いをふくらませるものでした。また、「赤ちゃんからのメッセージ」は、照明を落とした室内で行ないます。静かな音楽の中で、学生が録音した産声のテープを流し、赤ちゃんの映像を映しながら詩を朗読するというものです。感動し、涙するご夫婦もいらっしゃいました。大切な人生の一大イベントである出産を温かく演出でき、赤ちゃんへの思いやりを育てる企画

でした。

参加者からの手紙

両親学級を終えて数日後、数通の手紙が届きました。その手紙には、「一回一回参加させていたくださったにいつも素晴らしい“心”をいただきました。夫との間にできた子供がおなかにいること、臨月に入りみんなが待ち望んでいること、どれをとっても素晴らしいことばかりだと思わせていただきました」「父親として微力ながら今後の子育てに生かしていきたいと思います」などを書いて下さっていました。学生の一生懸命取り組んだ企画が、参加者の心を動かしていったのだと思います。

学生と両親との思いやりの 相互作用と「産み出す力」

4回の両親学級の間学生と参加者は相互作用しながら、成長していったように思います。私は、学生が本来持っている力や可能性を育てられてゆくことの大切さに気づきました。それは「助産」ということにとってもよく似ています。学生の「産み出す力」をいかに引き出していけるのかが、私の教員としての課題です。卒業生には思いやりと両親学級で学んだ実践力を持って、長く助産婦として活躍して欲しいと願っています。

次は聖バルナバ病院に勤務し、ご活躍中の山松桂子さんにバトンを渡します。